

健康文化

## 家族

今井田 二三子

今年も I K家の大型ワゴン車に便乗させてもらい奥さんの御両親の法要に弟さんの住まいのある岡崎へ行って来ました。

その奥さんに初めて会ったのは私が女学生の頃、ご両親が私の家の近くにある実家を訪れられ、その時立ち寄られた時で、まだその方が三、四歳の頃だったでしょうか。そしてあとから御両親には子供がなくて、その女の子は養女であると聞かされました。御両親はその女の子を大変可愛がっていらっしゃるのを感じましたが、その後暫くしてお母さんが家を出てゆかれたと誰からともなく聞かされました。お父さんの方は幼い女の子を抱えての仕事は大変だった様子で、誰か女の子の母親になって下さる人はないだろうかと母達に話していらっしゃるのを横から聞いたような記憶があります。

或る時「母親になってもらえる人がありました」と話してゆかれて暫くしてから新しい御夫妻はその女の子と二歳ぐらいの男の子を連れて私の家の直ぐ近くの畠に来られるようになりました。終戦前後だったように思いますが、関西から近くの町に転居してこられたのだと教えられました。

新しい奥様は本当によく働かれる心の優しい方で、私の母などは畠に来られて休憩に立ち寄られるのを何時か心待ちにしているようになりました。その若い二度目の奥さんも十数年前に他界され、御主人も一昨年亡くなられて今年がその十三回忌と三回忌なのでした。私が驚いたのは、考えて見れば当たり前のことなのかもしれませんが、その当たり前のことが少なくなっているのに I K家は一家を挙げて、昔の可愛い女の子は今はお孫さんもあるのですが、嫁いでいる娘さんとその子供さん、息子さんの0歳の赤ちゃんも含めて法要に参詣されたことでした。弟さんは奥さんを数年前に亡くされたため、法要に必要なと思われる品々がワゴン車の中に積まれているではありませんか。

静岡から来られた弟さんの実の叔父叔母さん方の義理の姪である姉さんやその家族の方々に向けられる眼差しに何の違和感もなく暖かいものが感じられ、姉さんの弟さんやその子供さんに対する心遣いも優しく細やかで、久しぶりに暖かい家族、一族に出会えたような思いで私の心も暖まる気がしました。

家族というのは血のつながりではなく、心のつながりではないかと改めて考えさせられました。

さて今度は私事になりますが、父が最初に婿養子にいった先に子供が二人あったことは母から何時とはなく聞かされておりました。そればかりではなく、私の幼い頃、母親も祖母さんも亡くなり姉が嫁いで一人残された息子のところへ、或る時から父は時々出かけていっては数日間滞在してくることがありました。フーテンの寅さんよろしく飄然と家を留守にする父なので何の違和感も感じなかったように覚えております。また或る時から息子の所を訪ねるのをピタリと止めたことについても何も感じませんでした。その時幼い私に語るともなく家に居る兄の名前を言って「俺は矢張りTの厄介になるからな」とポツリと洩らした言葉が妙に淋し気であったのが今も心の隅に残っています。その異母兄も戦後まもなく亡くなったと風の便りに伝わってきました。

この父の娘（私の異母姉）になる人がたまたま青果市場で出会った近所の人に私の家のことを種々尋ねていたと聞かされ、私は急に会ってみようという気持ちが沸き起こり教えられた場所を頼りに家を探して訪ねて行きました。私より二十歳も年上のその人は元気で父方の祖父にそっくりの顔立ちで、もし父が年寄るまで生きていたらこんな顔になったのではないかと思われました。

「私のところは木曾川の堤の下に桃ノ木が沢山あり、おじいさまは桃島をめぐってにければすぐわかると言われました」姉なる人のその言葉を聞いて、私の子供の頃、父が木曾川近くの桃島の話をしていたことがあり、今まで何処の島のことを話していたのか不思議に思っていたのがやっと理解でき、父は此処にもまた訪ねていたのだと知りました。父はこの二つの家族をどんな気持ちで眺めていたのだろうか心の中に浮かんできました。

時は丁度盆にあたり仏前に灯りを点しながら心の中で父に問いかけてみました。

「男はつらいよ。家族はまあそんなものさ」そんな返事が返ってきたような気がしました。

(内科開業医)